

# 伝達能力論はいかにして構築されたか

伊 原 巧

## On the Process of Construction of the Notion of Communicative Competence

Takumi IHARA

### I. はじめに

コミュニケーション・アプローチが提唱されて久しい。変形文法への批判としての社会言語学の影響を強く受けて誕生したと言われるこのアプローチには、現在、様々な教授法が提唱されているが、程度の差はあれ、いずれも、機能と概念を中心にしたシラバス構成であることと、学習者のニーズに基づいた授業設計であることにおいて共通点が見られる。そのため、シラバス構成が文法・構造中心であり、多様な目的をもつ一般的な英語学習者を教授対象とする我国の英語科教育には、このアプローチの直移入はなじまないものだとも言われる。しかしこのアプローチは、従来あまり注目されてこなかった伝達機能や伝達目的といった現実の言語使用に力点を置くことによって伝達能力の習得をめざそうとするものである。それゆえ、シラバス構成や授業設計における相違があろうとも、このアプローチの主張には我国の英語科教育が今後も吸収していくべき内容や項目が数多く含まれているものと思われる。

ところで、このコミュニケーション・アプローチが変形文法への批判としての社会言語学の影響を強く受けて誕生したものであるのなら、このアプローチの支柱となる伝達能力の概念も、変形文法の言語能力論の内包する問題点を批判する社会言語学の様々な考慮を取り入れて誕生したものであるとみることができる。そうだとすれば、英語科教育において言語能力の習得に関わる問題を考えていく場合、まず最初に取り上げておかなければならないことは、変形文法の言語能力論に対する社会言語学の問題提起がどのようなものであったかということであろう。

そこで本稿では、まず、変形文法の言語能力論を概観し、次に、社会言語学が変形文法の言語能力論のどのような側面を問題にしたのか、さらには、そこからどのような過程を経て伝達能力論の構築に至ったのかを検討してみることにする。

### II. 変形文法の言語能力論

1970年代の変形文法の言語能力論は、文文法の規定、ならびに文文法に属する意味解釈規則とその枠を越えて機能する意味解釈規則の提示を経て、文法的言語能力と語用論的言語能力の提示へと発展を示したが、いわゆる社会言語学派の批判の対象となり、また、その伝達

能力論構築の要因ともなったのは、Chomsky (1965) の *Aspects of the Theory of Syntax* であろう。この中でも第1章の Methodological Preliminaries に言語能力に関わる概括的記述があり、これが社会言語学者その他に問題にされたところのようである。そこで、ここでは標準理論（以下、「変形文法」とする）における言語能力論をこの第1章に依拠しながら概観しておくことにしよう。

変形文法の成功は高度なレベルの理想化・均質化に負うところが大きいと言われる。分析対象を高度に理想化・均質化して扱うのである。このことは次の一節に端的にうかがえる。

Linguistic theory is concerned primarily with an ideal speaker-listener, in a completely homogeneous speech-community, who knows its language perfectly and is unaffected by such grammatically irrelevant conditions as memory limitations, distractions, shifts of attention and interest, and errors (random or characteristic) in applying his knowledge of the language in actual performance<sup>1)</sup>.

すなわち、現実にはありえない、完全に均質な言語社会における理想上の話者・聴者を対象として扱う。この話者・聴者というのは、記憶の限界や注意の散漫や、注意と関心の転移に影響されたり、誤りを犯したりしない者という高度に理想化された対象のことである。

さらに、変形文法は、話者・聴者が自分の言語について持っている知識である言語能力 (competence) と、具体的場面における言語の現実的使用である言語運用 (performance) を根本的に区別する。

We thus mark a fundamental distinction between *competence* (the speaker-hearer's knowledge of his language) and *performance* (the actual use of language in concrete situations)<sup>2)</sup>.

この言語能力に関して変形文法は、Saussure の *langue* との関連を認めつつも、それを乗り越えて Humboldt 流に生成過程の体系であるとする。

The distinction I am noting here is related to the *langue-parole* distinction of Saussure; but it is necessary to reject his concept of *langue* as merely a systematic inventory of items and to return rather to the Humboldtian conception of underlying competence as a system of generative processes<sup>3)</sup>.

さらに「完全に妥当な文法」のあり方に関して、理想的な話者・聴者は無限にある文をすべて理解できるものであって、その理解のされ方を示す構造記述がなされなければならないとする。

A fully adequate grammar must assign to each of an infinite range of sentences a structural description indicating how this sentence is understood by the ideal speaker-hearer<sup>4)</sup>.

すなわち、理想的な話者・聴者は、その言語で許される音声表示と意味表示の組み合わせをすべて、そしてそのみを生成する規則の体系を知識として内蔵しているということであり、その記述が文法の目標であるというのである。そこで、このように、生成規則の体系を言語能力とするのであれば、変形文法で言う言語能力とは無限の数の文を理解・生成する文

法力 (linguistic competence) という限られた能力を意味すると考えてよいことになる。

さらに、変形文法は、人間が共通にそして生得的に備えている言語機能、すなわち言語習得機構 (language acquisition device) の存在を仮定する。母語習得に際して、子供は、同じ言語共同体に育つとしても個人によってかなり異なる多種多様の経験をする。子供が観察する一次的言語資料には適格文の例もあれば、非文の例もある。それにもかかわらず、子供は特定の形式と機能を持った要素と規則を含んだ均質な文法体系を獲得する。このことに関して変形文法は次のように述べている。

As a precondition for language learning, he must possess, first, a linguistic theory that specifies the form of the grammar of a possible human language, and, second, a strategy for selecting a grammar of the appropriate form that is compatible with the primary linguistic data<sup>5)</sup>.

つまり、子供は一次的言語資料を与えられれば、そこから適切な文法を案出する方略を持っているからであるとするのである。

そこで、この言語習得装置なるものの存在を認め、それを人間に共通にそして生得的に備わっているものと仮定するのであれば、その言語習得装置の出力である文法力、すなわち言語能力も均質な言語社会に共有されているものであるということであり、従って変形文法は言語能力も均質的なものであると仮定していると考えてよいことになる。

これに対して言語運用は、理想状態においてのみ、言語能力を直接的に反映しうるものであるが、現実には、言語運用が言語能力をそのまま反映しているということはありえないとする。ありのままの言語活動の記録をとってみると、その中には、数多くの、話しはじめの言い違いや、規則からの逸脱、中途における計画の変更、などが含まれているからだとするのである。

Only under the idealization set forth in the preceding paragraph is performance a direct reflection of competence. In actual fact, it obviously could not directly reflect competence. A record of natural speech will show numerous false starts, deviations from rules, changes of plan in mid-course, and so on<sup>6)</sup>.

いわば、現実の発話は言語運用上の諸要因によって多分に「汚染」されている可能性があることなのである。ここに、変形文法が言語能力の解明を言語運用ではなくて、ひたすら文法力に求めることになった理由がある。言語運用でためされるのは文法性 (grammaticalness) ではなく、容認可能性 (acceptability) なのである。このようなことから、変形文法は、理想的な話者・聴者の言語能力の解明にあたり、その方法論として、分析資料を現実に運用されている発話に求めるのではなく、母語話者・聴者の母語に対する直感及び内省的判断に求めることになった。つまり、分析の妥当性確保のため、分析資料が発話の現実から遊離した形で整えられ、均質化されることとなったのである。

### III. 社会言語学派による批判

Hudson<sup>9)</sup>によると、社会言語学は、言語を社会文化的な現象として捉え、言語の変異に

注目する。つまり、言語変異と社会・文化との相関関係あるいは言語使用者、場面等、発話をとりまくコンテキストとの関係を扱う。従ってそれは非常に広い守備範囲をもつ学際的な言語研究の分野であり、研究の立場や方法が多様であると言える。しかし、構造言語学や変形文法と異なり、いずれも実際に使用されている言語を資料として扱うことと、言語構造の研究領域を言語使用の社会的側面にまで広げた点で共通点をもつと言えよう。

このような研究対象と方法論をとる社会言語学が変形文法と真向から対立するのは当然なことであった。変形文法の言語能力論への批判は、Habermas<sup>9)</sup>、Halliday<sup>10)</sup>、Jakobovits<sup>11)</sup>、Widdowson<sup>12)13)</sup>等、様々な立場から様々な批判がなされているが、本章では、幅広い社会言語学派の中でも、変形文法の言語能力論に得に強い批判を投げかけたと思われる Labov<sup>14)</sup>と Hymes<sup>15)</sup>を取り上げ、彼らの批判を概観することによって、伝達能力論の構築過程をみることにしよう。

### 1. Labov の批判

Labov の変形文法に対する批判は、基本的には、言語能力の均質性という仮定と言語能力解明のための方法論に向けられたものであるとしてよいだろう。変形文法を均質性と直観という二つの仮定に立脚するものとみなす Labov は、変形文法が社会的行為や発話の研究を排除してきた点を指摘し、言語共同体における伝達手段としての言語の研究の必要性を主張する。

ところが、II章でもふれたように、変形文法による言語共同体の言語の排除にもそれなりの理由がある。このことは Labov も認めており、次の四つの理由をあげている。

1. The Ungrammaticality of Speech
2. Variation in Speech and in the Speech Community
3. Difficulties of Hearing and Recording
4. The Rarity of Syntactic Forms<sup>16)</sup>

これらの困難点の変形文法だけでなく、それまでの Saussure 流言語学にも competence や langue といった言語の抽象的研究のみを促してきたわけである。しかしながら、こういった言語の抽象的研究だけでは言語の全体像を記述するには不十分であるし、それがかかえる問題点も数多い。例えば、言語の抽象的研究が competence や langue の研究を求めて言語共同体の言語から得られるデータを排除したために、それが扱うデータに限界があるということである。Labov は、最近では限られたデータで言語理論を発展させることの方が言語共同体の言語を研究することよりも困難であるとしている。

But there are also disadvantages to the abstract study of language. Some of its limitations have recently become painfully prominent ; the difficulties of developing linguistic theory with this limited data base are perhaps even greater than those outlined above for the study of the speech community<sup>17)</sup>.

さらに、これらの言語学は言語共同体における言語の変異を切り捨て、そこに共通の抽象的な構造体を求めることを目標としながら、資料の均質性を求めて、ついには個人語 (idiolect) を対象とするに至ったのである。Labov はこの矛盾を Saussurian Paradox と

呼ぶ。

Thus we have *Saussurian Paradox*: the social aspect of language is studied by observing any one individual, but the individual aspect only by observing language in its social context<sup>18)</sup>.

この最も均質的な資料としての個人語の抽象的研究に対し、Labov はそれが切り捨てた言語共同体における言語変異を問題にする。彼は言語変異と社会構造の相関関係を膨大な資料と新しいアプローチを用いて調べ、言語に社会的階層差があることを証明した。例えば、ニューヨーク市に住む人の母音の後の r 音の出没が社会的階層と関連していることを見ごとなデータで証明したその成果はよく知られている<sup>19)</sup>。

このように言語を現実の言語使用の側面から考えてみると、それは決して一様なものとは言えず、それには場面・状況・男女の区別・地位・年齢といった社会的文化的要因に基づいたほぼ一定の変異が認められ、そのことを証明した Labov の研究は、変形文法の仮定する言語能力の均質性に対して問題を提起するものである。

さらに Labov は、この均質性に関連して、母語話者・聴者の直感や内省的判断を手がかりにする変形文法の研究方法に対しても挑戦する。彼は数量詞と否定を含む文の意味解釈に関する判断について調査を行い、母語話者・聴者の判断を分析の対象にすることの問題点を指摘する。ここではその一端をみてみよう。

Labov は次の文を17人の被験者に示し、各組の文のどちらを好むかをたずねることによって、意味解釈に関する判断の一貫性を調査した<sup>20)</sup>。(1)(2)のグループは統語的差異を示し、(3)(4)のグループは意味的差異を示す例文である。

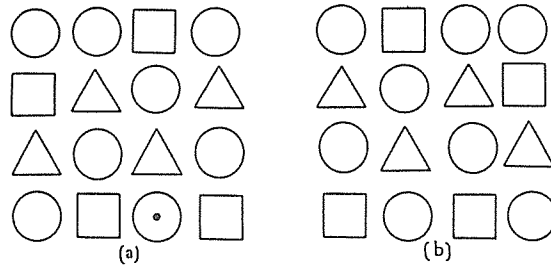
- (1) a. All the boys didn't leave until six.  
b. All the boys didn't leave, did they?
- (2) a. All the guys won't start work until the whistle blows.  
b. All the guys haven't started work, have they?
- (3) a. Since the plant's locked, all of them haven't started work yet.  
b. All the guys haven't started work yet; some are still on their lunch hour.
- (4) a. All the guys don't like John; some of them can't stand him.  
b. All the guys don't like John; none of them has anything good to say about him.

もし、部分否定の判断を一貫して示す被験者なら、(1 b)、(2 b)、(3 b)、(4 a)を選び、全体否定の判断を一貫して示す被験者なら、その逆を選ぶことになる。ところが結果は次のようであった。

まず、(1)(2)については17人中8人しか一貫した答えを示さなかった。次に、(3)(4)については17人中9人しか一貫した答えを示さなかった。そして、両グループの例文に一貫した答えを示したのは17人中3人しかいなかった。さらに、この3人のうち、両グループの例文に同一の一貫した答えを示した者、すなわち部分否定と全体否定のうちのどちらか一方の意味解釈を一貫して示した者は1名しかいなかった。このように、母語話者・聴者の意味解釈に関

する判断は一貫したのではなく、そこには明らかに変異があることが確認された。このことは言語能力の均質性という変形文法の仮定を完全に切り崩すと同時に、母語話者・聴者の判断を分析対象にすることの問題点も提起してくれている。

そこで、この点を明確にするため、Labov は次に母語話者・聴者の判断とコンテキストとの関係を扱うことになる。彼は被験者に下図を見せ、All the circles don't have dots in them. という文が示すのは(a)(b)のどちらかであるかをたずねる一連の調査を行った<sup>20)</sup>。



そのうちのある結果では、58人の被験者のうち39人が全体否定の解釈を示し、部分否定の解釈も可能だと答えたのは、そのうち17人しかいなかった。さらに Labov はコンテキストを操作した場合についても調査した。つまり、(a)の図の点が八つの円のうちの一つにある場合と、四つにある場合と、七つにある場合に分けてたずねてみた。すると、点のある円が一つの場合は、大多数の者が全体否定の解釈を示すが、四つの場合には、約半数の者が部分否定と全体否定の両方の解釈が可能だとし、しかも、これらの答えと単独文の場合の答えとの間には相関性が全くないと報告している。このことは明らかにコンテキストによって、母語話者・聴者の判断というものに変化することを示しており、母語話者・聴者の判断こそ、コンテキストその他の要因によって「汚染」されたものである可能性が大いにあるということになる。

このように Labov は、言語能力の均質性という仮定と、母語話者・聴者の直感及び内省的判断を分析対象にする変形文法の方法論に対して問題点を提起し、みごとなデータでもって反証を示したのである。

## 2. Hymes の批判

Hymes は変形文法の言語能力論に対する批判を全面的かつ体系的に展開したと言える。彼の主張の基調は、真の言語能力というものは言語を使ってまともに意思が伝達し合えるものでなければならないとするところにある。すなわち、文法力だけではなく、それを含む言語使用の能力こそが真の言語能力であるとするのである。先にふれたように、現実の言語使用は特定の社会的場面で行われるものである。現実の話者・聴者が相手の年令、性格、地位、人柄等を考慮しながら行うものである。従って、言語使用の能力は、必然的に、社会文化的コンテキストと関わりをもつことになる。このため、Hymes の言う言語能力論が、言語能力の概念を均質的な言語共同体の理想的な話者・聴者の完全な知識であるとし、従って社会文化的制約には影響されることのないものであるとする変形文法の言語能力論と全面的

に対立するのは当然なことであった。

変形文法の言語能力論に対する Hymes の批判は、基本的には、変形文法が理想化・均質化のために、重要な分析対象を汚染されたものと一旦横に置いたことと、この横に置いたものへの対応を問うものであるとしてよいだろう<sup>22)</sup>。

まず、Hymes は、変形文法の言う言語能力と言語運用の範疇では、言語能力を理想化された対象として扱い、他方、言語運用を文法分析上の心理的副産物として扱っているために、当然問題にされるべき社会文化的特徴が不当に無視されている、と指摘する。

Such a theory of competence posits ideal objects in abstraction from sociocultural features that might enter into their description. .... The theory of performance is the one sector that might have a specific sociocultural content ; but while equated with a theory of language use, it is essentially concerned with psychological by-products of the analysis of grammar, not, say, with social interaction. As to a constitutive role for sociocultural features in the acquisition or conduct of performance, the attitude would seem quite negative. Little or nothing is said, and if something were said, one would expect it depreciatory<sup>23)</sup>.

どのような科学研究においても理想化は必要である。分析対象の本質解明には、それに付随する副次的要素を捨象し、簡素化することが許される。ところが言語運用上の社会的要因から現実に生じ、それゆえ、分析上どうしても扱わなければならないはずの様々な言語変異を汚染されたものとみなし、それらを考慮外に置くことによって言語能力の解明をめざす変形文法の理想化は科学的に妥当性のある簡素化とはみなし難い。それが科学的に妥当性のある簡素化であるためには、例えば、言語能力には社会的文化的次元の要素が含まれるとか、その要素がどのようなものであるのか等への言及がなされておかなければならないが、変形文法の言語能力論にはその旨が述べられていないからである。

The restriction of competence to the notions of a homogeneous community, perfect knowledge, and independence of sociocultural factors does not seem just a simplifying assumption, the sort that any scientific theory must make. If that were so, then some remark to that effect might be made ; the need to include a sociocultural dimension might be mentioned ; the nature of such inclusion might even be suggested<sup>24)</sup>.

そこで Hymes は、変形文法が社会文化的要因を無視して理想化をすすめるに至ったのは、科学的に妥当性のある簡素化のためではなく、この理論がもつ観念的側面のためであるとす<sup>25)</sup>。分析対象を簡素化して扱うことと、現実から遊離した分析対象を扱うこととは明確に区別されなければならないのである。

Hymes は、また、この観念的側面は変形文法の言う言語運用についても見られるとする。変形文法が言語運用を、根底にある体系を不完全にしか反映していないものであると観念的に捉えている点である。なるほど、言語運用はその根底にある体系の不完全な表示であるとも言えよう。ところが、文法的に不完全な文や説明不可能な文であっても、コンテキストの

中では適切である場合がある。また、逆に、文法的に正しい文であっても、コンテキストの中では不適切になる場合もある。さらに、子供の言語習得の過程をみると、Hymesの言うように、子供は文法的な知識だけでなく、いつ、だれと、どこで、何を、どのように話すべきかという言語使用の適切さに関する知識も習得していくことがわかる。

We have then to account for the fact that a normal child acquires knowledge of sentences, not only as grammatical, but also as appropriate. He or she acquires competence as to when to speak, when not, and as to what to talk about with whom, when, where, in what manner<sup>26)</sup>.

これらのことは、変形文法が言語運用の現実を分析せずに、それを観念的にしか捉えていない証左であるということと同時に、言語運用に関して次のことを示唆してくれていることにもなる。

There are rules of use without which the rules of grammar would be useless<sup>27)</sup>.

ところが、変形文法は言語運用を観念的に捉え、社会文化的要因を無視したために、現実の言語運用とその根底にある運用の規則とを明確に分化して捉えることができなかった。そしてこのことが、変形文法の言う（根底にある）言語能力とその不完全な反映である（現実の）言語運用という安易な二分法を許すことになり、その結果として、トータルな意味での言語使用能力の解明ができなくなったのである。そこでHymesは、この二分法の枠組を乗り越え、言語能力というものを社会文化的観点から捉えなおすことを提案する。そして彼がこのような意味での言語能力に与えた名称が伝達能力（Communicative Competence）というものである。

#### IV. 結 語

変形文法への批判としての社会言語学の高揚の中で誕生してきた伝達能力論の構築過程の検討にあたり、まず変形文法の言語能力論を概観した。その中で、変形文法は、現実にはあり得ない均質社会の理想的な話者・聴者を研究対象に定めているとし、さらに、その話者の言語能力の解明にあたって、方法論として分析資料を現実の発話でなしに母語話者・聴者の直感と内省的判断に求めていることを見た。

次に、この言語能力論に対する社会言語学派の批判をLabovとHymesの中に求めた。その中で、彼らは、言語資料を現実社会に求め、言語変異こそ言語の真の姿であると認め、言語変異と社会構造の相関関係を追求することによって変形文法の研究対象と方法論に対抗していることを見た。さらに彼らは、文法力という変形文法が扱う狭い範囲の言語能力論の限界を指摘し、言語能力を社会文化的観点から捉え直すことを提案していることを見た。

このような過程を経て伝達能力論の構築に至った社会言語学派の主張は、理想化・均質化といった普遍に重点を置く変形文法の方法論に対し、変異性をもつ個体を研究対象とすることから出発する方法論の重要性を改めて指摘してくれたものと捉えてよい。また、彼らの主張は、個体を研究対象とすることから出発したがゆえ、その個体と深く結びついた社会文化的背景をも含めたトータルな意味での言語能力論、すなわち伝達能力論に到達し得たと言え



るのである。

伝達能力論の構築過程を振り返り、それに検討を加えてきたが、英語科教育において言語習得の問題を考えていく場合、社会言語学派の提起してくれた伝達能力論の意義は深い。コミュニケーション・アプローチに見られるように、言語習得を単に変形文法の言う言語能力の習得だけではなく、言語使用の側面も含めた形で捉えることを提起してくれたからである。それならば、言語習得の問題を考えていく上で次に問題となるのは、伝達能力とは一体いかなるものかということである。伝達能力の解明が次の課題となる。

### 註および参考文献

- 1) Chomsky, N. 1965, *Aspects of the Theory of Syntax*, MIT Press, p. 3.
- 2) 前掲書, 4頁。
- 3) 前掲書, 4頁。
- 4) 前掲書, 4—5頁。
- 5) 前掲書, 25頁。
- 6) 前掲書, 4頁。
- 7) 柴谷方良 1982「社会言語学と変形文法」『言語』Vol.11 No.10 大修館 25頁。
- 8) Hudson, R. A. 1980, *Sociolinguistics*, Cambridge U. P., pp. 1-20.
- 9) Habermas, J. 1970, 'On systematically distorted communication', *Inquiry* 13, 3, Autumn, pp. 205-218.
- 10) Halliday, M. A. K. 1970, 'Language structure and language function', in Lyons (ed.), *New Horizons in Linguistics*, Penguin, pp. 140-165.
- 11) Jakobovits, L. A. 1970, *Foreign Language Learning : A Psycholinguistic Analysis of the Issues*, Rowley, Mass., Newbury House.
- 12) Widdowson, H. G. 1971, 'The teaching of rhetoric to students of science and technology', in *Science and Technology in a Second Language*, CILT, pp. 31-40.
- 13) ——— 1975, 'EST in theory and practice', in *English for Academic Purposes*, ETIC Occasional Papers, The British Council, pp. 1-13.
- 14) Labov, W. 1972, *Sociolinguistic Patterns*, University of Pennsylvania Press.
- 15) Hymes, D. H. 1971, 'On communicative competence', in Pride and Holmes (eds.), *Sociolinguistics*, Penguin, pp. 269-293.
- 16) 註14) の文献, 188-191頁。
- 17) 註14) の文献, 191頁。
- 18) 註14) の文献, 186頁。
- 19) Labov, W. 1966, *The Social Stratification of English in New York City*, Center for Applied Linguistics に示された成果のことを指す。
- 20) 註14) の文献, 193-194頁。
- 21) 註14) の文献, 194-196頁。
- 22) この点に関し、Widdowson は *Learning Purpose and Language Use* (1983, Oxford U. P., p. 23) の中で次のように述べている。

The objects to Chomsky's concept of competence, as expressed by Hymes in particular, are directed not at its analytic character, but at its inadequacy in not accounting for other

aspects of language knowledge apart from the knowledge of sentence structure.

- 23) 註15)の文献, 271頁。
- 24) 註15)の文献, 272頁。
- 25) Hymes はこの観念的側面のことを, 註15) の文献272頁で 'a Garden of Eden view' と呼ぶ。
- 26) 註15)の文献, 277頁。
- 27) 註15)の文献, 278頁。

(1990年9月13日 受理)